

II-14 土中水の電気浸透的流動と脱水機構

日本大学理工学部 准員 浅川美利

1. 概要 電気浸透による土中水流動の因子や脱水機構などの基本的問題に触れ、その理論的解析や実験によって得た結果を報告する。取り扱いとして次のような点を挙げ、それぞれについて考察した。

(1) 電気浸透式として一般に表わされている、 $v_e = \text{const.} \cdot \frac{\rho}{\epsilon} \cdot \frac{E}{l}$ の個々の項数はどんな界面要因によって支配されるか。また一般の土が有する電荷 ($\rho/\text{const.} \cdot \epsilon$) とそれと支配する主な原因は何か。

(2) 動水的流動 ($g_R = A_v \cdot i_a \cdot k_R$) と電気浸透的流動 ($g_e = A_v \cdot i_e \cdot k_e$) との相似点と相異点。両浸透係数 (k_R と k_e) の関係。

(3) 電気浸透脱水機構と木槽排水の類似解析。

(4) 脱水過程と電流値減少過程の類似性。

(5) 脱水による土の収縮機構と圧密促進の点での有用性。

以上の各項を検討した結果について述べる。

2. 電気浸透現象とは

固相を水が飽和或は全面附着しているような土の毛管系では、毛管内面の液相に吸着した固相の解離によるカチオンによって $e =$

$\rho/\text{const.} \cdot \epsilon$ なる電荷をもつ電気二重層が形成される。この界面が直流電場におかれるとその電荷と電場のポテンシャルによって電気力 ($e \cdot E/l$) を生ずる。その力は壁に固着していない二重層部分(拡散層)の水を流動せしめる。この流動は自由水の流動と誘引するもので毛管中の水全体が流れるものではないと考へられている。

3. 電気浸透における流動と脱水の区別

ここでいう流動と脱水は次のような理由によって区別した。

流動：毛管中に移動した水が地の側から等量流入し、液損失がないもの。

脱水：移動しただけの水量が毛管中で損失するもの。従って水位の変化が刻々記し、位置エネルギーの減少によって流速が減ずる水槽中の水の放出に類似する現象である。

4. 電気浸透流動と動水流の相似と相異

毛管中に流れる液の流量に関し、電気浸透流と動水流とを比較する。

$$g_e = k_e \cdot i_e \cdot A_v, \quad g_R = k_R \cdot i_a \cdot A_v \quad \dots \dots \dots (1)$$

表-1 動水流と電気浸透流の相似点と相異点

要 因 比 較	動 水 的 流 動	電 気 浸 透 的 流 動	備 考
浸透の原因	動水圧力	電場と界面二重層の電荷による電気力	電気エネルギー → 運動エネルギー 位置エネルギー → 運動エネルギー
流速分布の形状	抛物線形状	二重層部分(固着層を除く)が抛物線状、自由水部分は最大速度まで直線状。	相対的に毛管壁面に近づく流速分布。 完全な抛物分布。(相異)
浸透係数 (ダイクソン) 支配条件 或は透水係数 前持量	$\text{cm}^2/\text{sec} (\text{L} \cdot \text{T}^{-1}), (\frac{\text{cm}^2 \cdot 100}{84})$ 毛管形状、半径及び液の物理量 毛管形状、半径支配する。	$\text{cm}^2/\text{sec} / \text{rad} / \text{cm} (\text{L}^2 \cdot \text{T}^{-1} \cdot \text{E}^{-1})$ (const. $\frac{\rho}{\epsilon}$) 界面の電気的性質と液の物理量 毛管形状と直接関係をもたない。	単位ポテンシャルに対して同じ。(相似) 電気浸透では毛管径は直接影響しない 動水流では毛管径に比例する。(相異)
ポテンシャル	$i_a = H/e$ (無名数)	$i_e = E/l$ (rad/cm)	共にポテンシャルの大小に比例する。 (相似)
流動効果	$g_R / A_v \cdot l = k_R \cdot i_a / e$ 毛管径の大小に比例 (細粒工に対して小)	$g_e / A_v = k_e \cdot i_e / e$ 毛管径には無関係 (細粒工に対して大)	両、 i_e が共に相似するから、 支配条件は k_R, k_e とする。 従って k_R は毛管径に敏感する 引に k_e は無関係。(相異)

いま見掛けの加電面(加水面)を A 、長さ L とし、上の面を E とすると、(1)式の A_0 及び i_e 、 i_R はそれぞれ $(S_{fe})A$ 、 $\frac{E}{\alpha}L$ 及び $\frac{H}{\alpha}L$ となる。但し α は毛管変曲度で、突毛管長さ $l = \alpha \cdot L$ とすればよい。以上より(1)式は、

$$\left. \begin{aligned} i_e &= k_e \cdot (S_{fe})A \cdot \frac{E}{\alpha} \\ i_R &= k_e \cdot (S_{fe})A \cdot \frac{H}{\alpha} \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (2)$$

(2)式中 E 及び H は電場電圧及び水頭である。また k_e (電気浸透係数) $= (P/\eta) \cdot \gamma \cdot \text{const}$ 、 $k_R = F^2 \cdot \eta / g^2$ (Poiseilleの η と γ は透水係数)。
 γ : 電媒常数(一般に水は81)、 η : 粘性、 F : 毛管半径、 ρ : 水の単位体積重量及び const : 一般に 4π 。
 両者の相似度と相異度は表-1のようになる。

5. 電気浸透に關与する因子の分析

表-2は(2)式の個々の関数に対し、それに影響すると考えられる界面の物理的、化学的因子を分類したものである。

電気浸透を支配する(界面の性質中)ものはポテンシャルである。実験では個々の要因についてその変化を検べ、一般に電気浸透が適用される上の個有値などを求めてみた。

6. 電気浸透脱水理論

A) 脱水の時局過程

* 図-1(a)に示すような水で飽和された毛管を電場におくとき、一方の極に向って流れる水の移動速度は図-1(b)に示す水槽の水位変化と類似するものである。両者の差異は位置エネルギーの性格のみである。従って電気浸透の場合の位置エネルギーの変化を考えると、時局過程は全く同じ解析となしう。

- 解析に先立ち次の仮定をおく(図-1(b)参照)。
 (1) 水の速度分布を直線状とする。
 (2) 有効電圧は②に加わる電圧($E' = E - \Delta E$)で、
 (3) ④の電導度は λ 、②の電導度を λ' とする。
 (4) 脱水中温度及び界面性質の変化はない。

電気浸透による水の移動速度は;

$$\left\{ \begin{aligned} t=0 \text{ (初期)} & \text{ 時, } v_e = k_e \cdot i_e \text{ (} i_e = \frac{E}{\alpha} \text{)} \\ t=t' \text{ (任意の時間)} & \text{ 時, } v_e' = k_e \cdot i_e' \text{ (} i_e' = \frac{E'}{\alpha} \text{)} \\ t=T \text{ (平衡時間)} & \text{ 時, } v_e' = 0 \end{aligned} \right.$$

いま境界面 $m-n$ が dl 移動するに要する時間と dt とする、 $v_e' = -\frac{dl}{dt}$(3)

(3)式と $t=t'$ における速度条件より、

$$-\frac{dl}{dt} = k_e \cdot \frac{E'}{\alpha} - \Delta E = k_e \cdot \frac{E}{\alpha} \dots\dots\dots (4)$$

②の有効電圧は、電導度と λ 、電気抵抗と R とすると、 $E' = R \cdot i = (\frac{l}{A_0 \lambda}) i \dots\dots\dots (5)$

④の損失電圧は、 $\Delta E = E - E' = (\frac{A_0}{\lambda} \lambda') i \dots\dots\dots (6)$
 (5)及び(6)式より E 、 E' の関係は;

$$E' = \frac{E}{(\lambda/\lambda') \cdot (\frac{l}{\alpha}) - (\lambda'/\lambda) + 1} \dots\dots\dots (7)$$

表-2 電気浸透の関数とそれに影響する因子

因子	数	界面動電位 ζ (volt)	浸透係数 D	粘性 η (poise)	電場の電圧 E/l (Volt/cm)	組織係数 const. (dyne)	備考
液の性質	種類	◎	●	●			イオンの和濃度と関係し、イオンの移動速度に左右される。固相に結合する体の強弱に關係する。液の物理的性質に影響大。
	濃度	◎	●	●			
	温度	○	●	●			
固体の性質	鉱物成分	○				●	固体の解離に關係する。粒子の形と大きさで常に変化する。(Debyeの考え)
	粒子の形状						
電場の強さ					◎		界面利得が同じ時、浸透は比例する。
毛管構造と粗密度					○		毛管長さのポテンシャルを支配する。浸透量は有効面積が影響する。
備考		電気浸透を支配する数	上式との界面には const は異なる	左に同じ	外的条件としての支配数	通常 $4\pi \text{ const}$	

註表中◎は影響が最大、○普通、●実際には一定見做すもの。

(7)式を(4)式に代入して、

$$-\frac{dl}{dt} = Re \cdot l \left\{ \frac{E}{(\gamma/\kappa)(4L) - (\gamma/\kappa) + 1} \right\} \dots (8)$$

$c \sim d$ までの脱水を考え、 L を s と、 l が積分すると、

$$t = -\frac{1}{Re \cdot E} \int_L^{l_0} \left\{ (\gamma/\kappa)L - (\gamma/\kappa)l + 1 \right\} dl = \frac{1}{Re \cdot E} \left\{ 2L(\gamma/\kappa)L - l_0 + (\gamma/\kappa - 1)L^2 \right\} \dots (9)$$

$t = T$ (脱水完了)は(9)式に $l = 0$ であるから、

$$T = \frac{1}{2Re \cdot E} \left\{ L^2 \cdot \frac{\gamma + \kappa}{\kappa} \right\} \dots (10)$$

B) 任意の時間の理論脱水量

任意の時間 t までの脱水量は $g_T = \Delta L \cdot Av$ である。

ΔL は(9)式より得られ、

$$g_T = (L - l) \cdot Av = \frac{Av \cdot l \cdot \sqrt{L^2 \gamma^2 + 2Re \cdot E \cdot t \cdot (\gamma - \kappa)}}{\gamma - \kappa} \dots (11)$$

よって理論脱水速度 v_e' は、

$$v_e' = \frac{Re \cdot E}{\sqrt{L^2 \gamma^2 + 2Re \cdot E \cdot t \cdot (\gamma - \kappa)}} \dots (12)$$

C) 電流値の時間変化

適用電圧 E を一定とすると、脱水が進むに従って γ/κ が変化するので、電流値は時間と共に減少する。初期電流 i_0 、 t 時直後の電流 i_t とすると、(8)及び(12)式より、

$$\frac{i_0}{i_t} = \frac{L\gamma - l(\gamma - \kappa)}{L\gamma} = \frac{\sqrt{L^2 \gamma^2 + 2Re \cdot E \cdot t \cdot (\gamma - \kappa)}}{L\gamma} \dots (13)$$

脱水完了時の電流 i_T とすると、(10)式より

$$\frac{i_0}{i_T} = \frac{\gamma}{\kappa}$$

となり、 i_T を実測すれば、 $\gamma/\kappa = \gamma(\frac{i_0}{i_T})$ を知ることが出来る。

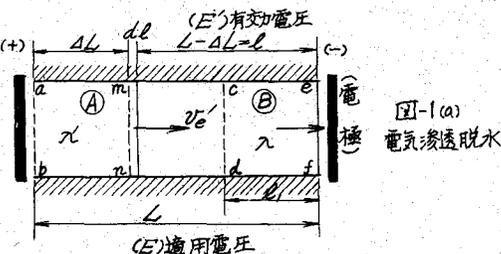
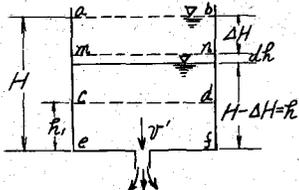


図-1(b) 水槽中の水の排水



7. 収縮機構の現象的考察

電気浸透による土の収縮は、蒸発による土の収縮機構と類似するものである。

土粒子骨格(毛管壁)に及ぼす圧縮力 $C_p = \pi r T \cos \alpha$ はメニスカスによる表面張力であり、膨張力 $C_s = A_w \gamma_w r_c$ は毛管中の静水圧による。

従って土の収縮は脱水によって両力の平衡が破れて起り($C_p > C_s$)、脱水の進捗に伴って進展し、 C_p が骨格圧力 C_r (土の固有値)に等しくなると完了する。蒸発速度は相対湿度が一定ならば一定の収縮を起すはずであるが、電気浸透では一定加電圧では漸次脱水速度が減少するので、収縮速度も遅くなる。(省略)

8. 試験方法、装置及び試料

A) 電気浸透流動の実験

- 測定槽: $40 \times 15 \times 7 \text{ cm}$ の寸法で、厚 5 mm のベークライト製のもの(一面ガラス板)。
- 試料及び液: 精純な相模砂を $4800 \sim 200 \mu$ までの標準網フルイで分け、それと適当に配合したものをを用いた(土自身の電解質の未知影響を除くため)。試験時の試料条件として、使用液 0.005 N KCl を水とし、最も相対湿度比とした。
- 電源: 電源能力を大きくし、整流を適切にするために図-1(a)のような半波回路とした。

電極には有孔炭素板を用いた。

(4) 測定方法:

測定中試料は常に飽和した。浸透水は陰極測に集水し、移動水量を溢流パイプから流出するようにして測った。

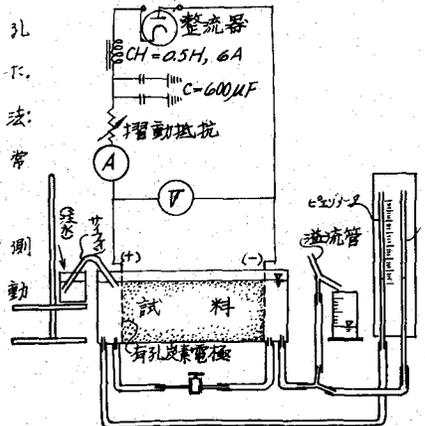


図-3(a) 電気浸透(流動)試験装置

B) 電気浸透脱水の場合

(1) 装置: 図-3(b) のような固定リング式圧密装置 (リング外径 50mm, 高さ 17mm のベリ製) を用いた。必要に応じマレー式荷重装置を用いた。

(2) 粘土 (埼玉) 一種を用い, 初期含水を一掃とするため ΔL テスターによって 40 回叩数として詰めた。使用水は蒸溜水とした。

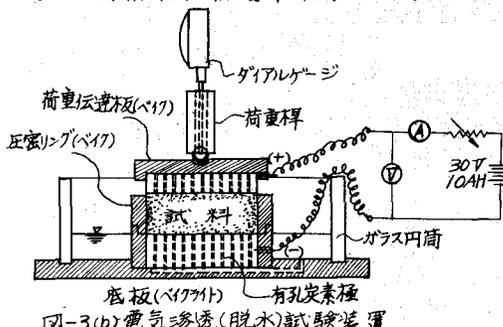


図-3(b) 電気浸透 (脱水) 試験装置

(3) 電源及び回路: 回路は流動の場合と同様電源には 30V, 10Ahr の蓄電池を用い, 加電圧は常に一定とし, 電流値のみの読みと記録した。電極は透水板と兼ねた有孔炭素板を用いた。

10. 結果の考察

図-4~5 は電気浸透脱水による収縮実験の結果の一例を示すもので, これより一連の実験から次のようなことを知ることができた。

(1) ポテンシャルの大きい程, 収縮速度が大きい。一般に一時留み以外でどのポテンシャル下でも脱水が終了し, 収縮過程は収斂する。

(2) 収縮過程と電流比 (i_t/i_0) の時間過程は概状的に全く相俟する。

(3) 通電時間によって増すが, 増加率は時間の経過に従って減少する。

(4) 透水度の極めて小さい土の圧密を促進する効果があると共に, 二次圧密を減らす。

(5) 載荷と通電との併用は圧密量を大きくし, その最終量は個々の最終量を合計したもののよりはるかに大きい。

図-4 いろいろな電圧による時間-収縮の関係

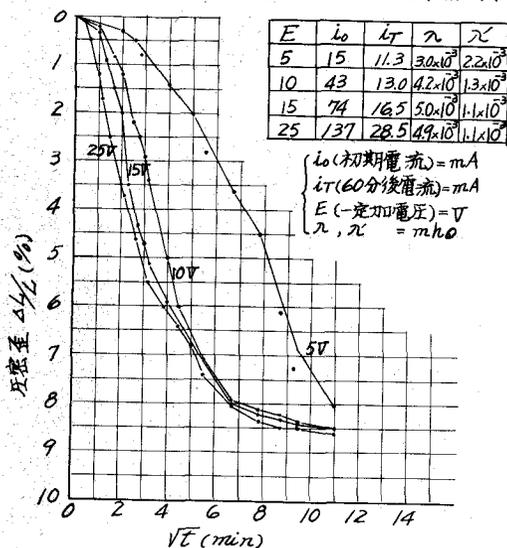
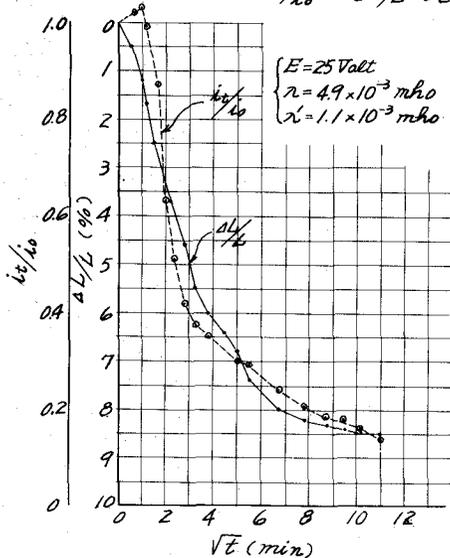


図-5 ある電圧下での $i_t/i_0 - t$ と $\Delta L/L - t$ の比較



本研究は 日本大学教授當山道三先生の御教示を得て行なったもので, ここに改めて敬礼申し上げる次第である。また実験及び整理などで多大の協力を惜まれないで本学土木工学科学生 倉田文一郎, 袴海武, 岡本照及び中村勉君に負うところが大であった。なお本研究は昭和32年度文部省科学研究費 (當山教授各個研究) の援助を受け行ったもので, ここに深謝の意を表す。